

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

2025 年 3 月 22 日	
所属部局・学年	野生動物研究センター
氏 名	關 真理江

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域) 日本、丹波篠山 2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験) 丹波篠山実習 3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで) 2025 年 2 月 18 日 ~ 2025 年 2 月 19 日 (2 日間) 4. 主な受入機関及び受入研究者 (京都大学〇〇研究所、〇〇博士／〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏) 里地里山問題研究所 鈴木 克哉 5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由) 写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。 本渡航は、2024 年度に開催された PWS symposium で登壇された川添氏の所属する里地里山問題研究所(さともん)が主催するじゅうがい対策プログラムに関するものである。調査は2月18日から19日にかけて、兵庫県にある丹波篠山市にて行われた。丹波篠山を含む兵庫の獣害対策機構は、ニホンザルやニホンジカの個体数管理や調査のモデルが整っている数少ない組織である。 実習の目標はさともんが掲げるひらがなのじゅうがい(獣害、獣害対策のための市民一帯の取り組み)を学ぶことで、じゅうがいへの枠組みを学び、研究者として還元できる方法を模索することであった。  図 1 実習の様子 プログラムは2日間の中で、じゅうがいとは何かと、概要の一側面として行われているニホンザル追跡、ライトセンサス、また地元住民との座談会を行った。(写真1,2) プログラムの中でさともん代表の鈴木氏は、ニホンザルやニホンジカの個体数管理には、行政による大規模な個体数調整(狩猟)ではとどまらず、地域ごとの個体数管理、被害を増やさないための囲い措置などの徹底、また野生動物の追跡など局所的な対策を行わなければならない、その実行には行政のみの取り組みでは不十分であり、その地に暮らす市民、さともんなどの組織を巻き込んだ地域一体型の枠組みを作っていく必要がある、と述べた。 本プログラムを行うまで、私は獣害対策の一番の有用な手段は直接的な個体数管理手段である狩猟であり、それを行政が取り仕切っていくべきだと考えていたので、実際に トップダウンに拘らないさともんのじゅうがい対策は新鮮な取り組みだった。 そのほか、ニホンザル追跡では、実際に個体数管理の一環で行われているニホンザル追跡を体験した。この日はちょうど捕獲檻にニホンザルが収容された日でもあったが、全頭殺さず雄のみを処分し雌は個体数を減らさないように逃がすなど、生態に即した対応をとっていることが印象的だった。 ライトセンサスでは、夜に林道内を調査しシカや夜行性哺乳類を探索した。冬も真っ盛りの時期なのでニホンジカが数頭見つかるのみで、そのニホンジカも動きがかなり鈍かった。交尾期を過ぎた冬は雌ジカの妊娠期に該当するので、その時期ニホンジカの活動が鈍くなるのだと考えた。 本プログラムを通じて、ヒトとヒトとのかかわりを通じて村一帯でじゅうがいに携わっていくにあつ ※メンター (PWS プログラム指導教員) が確認済の報告書を【report@pws.wrc.kyoto-u.ac.jp】宛にご提出ください。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



て必要な地域の現状、動物の生態の一端を学ぶことが出来た。じゅうがいは、人と動物が共に生き、関わるうえで必要な枠組みなのだと実感することが出来た。この取り組みを自身の研究でもある対馬の自然に還元し、安定した個体数管理のための地域連携の調整プラン作成に役立てていきたい。

図 2 最終日に行われた座談会

6. その他（特記事項など）

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

2025 年 3 月 2 日	
所属部局・学年	野生動物研究センター・博士課程 2 年
氏 名	板原 彰宏

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
兵庫県丹波篠山市
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
丹波篠山実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
2025 年 2 月 18 日 ~ 2025 年 2 月 19 日 (2 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
特定非営利活動法人里地里山問題研究所
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
本実習では、日本各地で問題になっている獣害対策について学んだ。特に、獣害対策が地域の人々と行政をつなげ、地域活性化にまでつながっていることが印象的であった。様々な地域で同様の問題が起きているため、地域と行政・民間企業等がうまく協力しながら、お互いの利益を創出したうえでキャッシュフローも回る仕組みが必要とされている。 1. 地方における少子高齢化や人口減少について 都市部から人を呼び込み、関係人口増加を狙うための数々の施策に興味を抱いた。今やほとんどの地方自治体が少子高齢化や人口減少といった課題に直面している。そこで、地域の魅力や取り組みを広く発信することでその地域に都市部から人を集め、その地域とのつながりを持つ関係人口の創出が必要とされている。地域住民の視点では毎日のありふれた出来事、毎年やってくる当たり前のイベントでも、都市部の方々からすると目新しく、毎日の生活では経験できないことが多い。放置された柿の収穫といった、食育活動として興味を抱かれやすいものから、栗の木の整備や金網策の点検といった少しディープな作業に至るまで、地域で必要とされる取り組みを幅広く用意し、多様なレベルの興味関心層に対してアプローチしていることがうまい仕組みだと思った。このような活動は今では企業の福利厚生や環境保全・地域貢献への取り組みとして導入され始めている。より多くの人を継続的に巻き込むために企業との協力を始める必要もあるのかなと考えた。 2. 地域と行政と研究者のつながりについて 地域の問題に対して、地域と行政と研究者が足並みをそろえて活動を進めているのが印象的であった。地域で取り組まないといけない課題は、獣害、空き家、水など挙げ始めるとキリがない。そうした課題に取り組むためには多大な経費と労力がかかるが、利益を生み出しづらい。そのため、地域住民の有志だけで活動を継続させるのは多くの場合難しく、行政のサポートが必要不可欠である。丹波篠山市では、獣害対策に行政も人員を充てて携わるなど、行政が積極的に地域の課題に携わっていたのが印象的であった。また、研究者も獣害対策に携わり、適切な個体数維持につながる鳥獣捕獲に取り組んでいるのはすごいと感じた。被害を生み出すから捕獲して個体数削減一辺倒になるのではなく、個体数の維持を目的とし、捕獲駆除を進められているのは珍しい事例のように思える。さともんの鈴木さん、川添さんをはじめとした方々が、長年にわたってサルの個体群の把握と追跡をしてきたからできることである。なかなか、鳥獣被害において地域に根付いた研究者は多くないように思うが、研究者として新しいキャリアのように思えた。丹波篠山市のように、地域・行政・研究者の強固な協力関係が生態系保全につながっているのはこれまでさともんが進めてきたプロジェクトで生まれた信頼の賜物だと思う。なかなか各自治体に研究者を派遣するわけにはいかないと思うが、都道府県レベルで行政の中あるいは行政に近いところに、地域でうまく活躍できる研究者を置く必要もあるのかなと考えた。 3. 地方を今以上に盛り上げるために 地方の魅力を発信し、関係人口増加、さらには人口増加に繋げるためには、地域内外に対してうまく

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

コミュニケーションをとることのできるスペシャルな人が必要であることを学んだ。都会に住む人の中にも、地域での暮らしに興味を持つ人は少なくない。その層に対してアプローチをしかけることで、関係人口の増加、そして、移住者の増加につなげる必要がある。ただ、これを実際に行うのは非常に難しい。なぜなら、地域の課題や魅力を言語化し、地域が進むべき方向を提示し、地域内で合意を形成し、うまく足並みを揃えて行動していかないといけないからである。さらに、都会との利便性なども考慮し、どのターゲット層に対してどういうアプローチを仕掛けるのかを考えることのできる、企画力やマーケティング力も兼ね備えていないといけない。もちろん、予算も限られているため多くの人員を確保するわけにはいかず、多くの企業では部署で分かれていそうな仕事を、一人あるいは少数の人員でリードしていかないといけない。間違いなく大変な仕事であるが、非常にやりがいのある仕事であるようにも思える。地方に食料生産はかかっているし、休暇でのリラックスといった精神的な充足も地方にかかっている。だからこそ、地方と都会、地方と企業、地方と学校といった、個人だけではなく組織とのつながりを強めていくことによって、地方の暮らしや産業を維持させられる仕組みが必要とされている。



サルの捕獲罠。遠隔で監視・操作することができ、管理者の負担も最小限に抑えることができる。地域・行政・研究者で協力して個体数の管理を行っていた。

4. さいごに

今回お世話になった特定非営利活動法人里地里山問題研究所の鈴木様・川添様、美味しいイノシシ肉と料理を準備してくださったカーリマンの新田様、獣が対策員の木下様、地元の皆様、素晴らしい学習機会を提供くださり本当にありがとうございました。先頭に立って丹波篠山実習を企画・指揮してくださった關さん、ありがとうございました！

※メンター（PWS プログラム指導教員）が確認済の報告書を【report@pws.wrc.kyoto-u.ac.jp】宛にご提出ください。

6. その他（特記事項など）

Research Activity Report
Supported by “Leading Graduate Program in Primatology and Wildlife Science”
(Please be sure to submit this report after the trip that supported by PWS.)

2025. 03. 03	
Affiliation/Position	Wildlife Research Center/D2
Name	Kana Arai

1. Country/location of visit
Tamba-Sasayama, Hyogo Prefecture
2. Research project
PWS Field Course
3. Date (departing from/returning to Japan)
2025. 02. 18 – 2025. 02. 19 (1 day)
4. Main host researcher and affiliation
Dr. Katsuya Suzuki (Director of Research Institute for Satomon) and Dr. Tatsuro Kawazoe (Research Institute for Satomon) 特定非営利活動法人里地里山問題研究所 “さともん”
5. Progress and results of your research/activity (You can attach extra pages if needed)
Please insert one or more pictures (to be publicly released). Below each picture, please provide a brief description.
This field course is an additional PWS field course planned and organized by PWS students. Day 1: We departed from Kyoto early in the morning to travel to Tamba-Sasayama, a city in the central-eastern part of Hyogo Prefecture. Our schedule began with brief self-introductions, followed by a presentation from Dr. Katsuya Suzuki, Director of the Research Institute for Satomon. He introduced us to his work as part of a non-governmental organization in Tamba-Sasayama, focusing primarily on human-animal conflicts involving Japanese macaques, sika deer, and wild boars, particularly in relation to crop damage and how it affects locals living in Tamba-Sasayama. He also explained the countermeasures they implement to mitigate these conflicts, such as effectively setting up electric fences, using GPS to track Japanese macaques, and driving them away with fireworks and/or loud noises. After his presentation, we spend the rest of our time in Tamba Sasayama actually experiencing the topics discussed in the presentation. We first conducted GPS surveys to track the locations of Japanese macaques. I found it interesting that they attach a very large magnetic antennae to the roof of the car to track the individuals while driving along the roads. Once the trackers detected a signal indicating a nearby macaque, we got out of the car and used an even larger antenna to determine the location of angle. I was surprised by how easily we could spot Japanese macaques roaming near houses and approaching crops. Within just a few hours of arriving in Tamba-Sasayama, I was able to see and experience firsthand the severity of the problem. The Research Institute for
 
GPS Surveys

Brief self-introductions and presentation from Dr. Katsuya Suzuki
Satomon conducts these surveys twice a day and informs local residents of the macaques' locations through “SaruIchi”, helping them prepare and implement countermeasures. We were also fortunate to witness a group of macaques (approximately 7~8 individuals) trapped in cages as part of population management efforts. It was nice to see how Satomon and the council office staffs communicated efficiently and worked together to address these issues within the region.

Research Activity Report
Supported by “Leading Graduate Program in Primatology and Wildlife Science”
(Please be sure to submit this report after the trip that supported by PWS.)

After conducting GPS and behaviour surveys throughout the afternoon, we prepared for dinner, boar stew (ぼたん鍋) before carrying out a light census survey at night.



Dinner: Black Bean Boar Stew

After dinner, we prepared for the light census survey. Although the heavy snow limited our visibility, we were still able to spot a few deer and a marten.

Day 2: We started the day early in the morning by talking with the locals of Tamba-Sasayama and hearing about their experiences in trying to mitigate human-animal conflicts. They shared the challenges they face in implementing countermeasure to drive the animals away, as well as the difficulties in bringing the community together. They also mentioned the lack of a young population, or even a sufficient population in general, in Tamba-Sasayama, and emphasized the need for more people. To address this, they discussed their efforts to attract people to the area by organizing local events such as black bean farming experience.

After listening to the locals' experiences, we went to observe the electrical fences designed for macaques, deer, and wild boars. We also had the opportunity to touch the fences, and I will never forget the sensation—it felt as if I were being hit or pushed strongly from behind. After examining the fences, we watched how the locals use fireworks to drive away the macaques. In 2024, the locals formed a group to regularly use fireworks to deter macaques, setting fireworks several times a month. By the end of the year, they noticed a decrease in the number of macaques coming into the villages. Although setting off each firework is quite expensive, the locals showed us firsthand how they set it off. The sound was incredibly loud, and I could easily see how it could effectively drive the macaques away from the village.

We ended the day with lunch, where a local restaurant “Kaariman” prepared taco rice, black bean stew, and sausage made from boar or deer meat. While serving us, the owner explained how they began using wild game meat in their cooking and shared how he wants to promote Tamba-Sasayama so that both people and wildlife can live together in harmony. While having lunch, we continued talking with the locals, and they shared their concerns about the aging and shrinking population, which has made it difficult for the community to muster the energy and labor needed to continue implementing animal damage prevention measures.



Light Census Survey Preparation



Checking the fences

Research Activity Report
Supported by “Leading Graduate Program in Primatology and Wildlife Science”
(Please be sure to submit this report after the trip that supported by PWS.)



Locals driving away the macaques by setting off fireworks



Delicious food prepared by “Kaariman”

From this field course, I was able to observe how Satomon, in cooperation with the government and relevant organizations, supports local communities that are working hard with limited resources to combat animal damage while promoting Tamba-Sasayama to bring in more generations. One of Satomon’s goal is to shift the perspective that wildlife damage is purely a negative impact on the community. In reality, wild animals are an integral part of the satoyama landscape and one of the area’s attractions. Therefore, their aim is not only to reduce damage but also to maintain the presence of wildlife, promote positive coexistence measures by bringing the community together, and ultimately revitalize the area. Although I was only there for two days, I was impressed by Satomon’s efforts to mitigate such problems in rural areas of Japan and was glad to have had the chance to see it firsthand.

6. Others

Acknowledgements: I would like to express my sincere gratitude to Dr. Suzuki and Dr. Kawazoe for introducing us to their work on Tamba Sasayama, as well as to the locals who warmly welcomed us with their knowledge and delicious food. I would also like to thank Marie Seki for organizing this PWS field course.

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

2025 年 3 月 7 日	
所属部局・学年	野生動物研究センター
氏 名	小林知奈

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
日本、兵庫県丹波篠山
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
丹波篠山実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
2025 年 2 月 24 日 ~ 2025 年 2 月 25 日 (2 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
里地里山問題研究所(さともん)
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
PWS 主催の丹波篠山実習に参加した。本実習の主な目的は、獣害に苦しむ地域において人と野生動物の共存を目指すさともんの活動と地域の実態を勉強させていただくことであった。 【丹波篠山の実情】 背景：大学で学ぶ農業への被害額といった数字に表れる被害のみならず、生活圏への侵入や個人の田畑への侵入など、地域レベルの獣害に苦しめられている。これらの対策として電気柵や防護柵の設置が政府から支援されているものの、知識不足・人手不足により有効な使用方法やメンテナンスが行われていなかった。 さともんの存在：地域のコミュニティに働きかけながら、地域外に住んではいるが地域の活動に関わる「関係人口」を増やすことで、有効な対策を持続させている。地域と行政の間にあったギャップをさともんがつなぐことで、三位一体の協力体制を確立している。獣害を減らしていくことで、地域の将来を明るくし、さらにそれが新規移住者を後押しすることで、さらに獣害対策も推進されていく…というポジティブな循環を作り、単に獣害をネガティブなものとして敵視するのではなく、むしろ地域活性の歯車としている。 現在の対策：全動物への対策として、市内の要所を防護柵で囲い、動物のアクセスする経路を減らすことで、捕獲管理を簡単にしている。また、アクセスポイントに近い地域に重点的に電気柵を推進することで被害が生じにくいように工夫している。サルについては、出没ポイントの日常的な調査やサル追い払い隊による煙花を用いた追い払いによって、地域住民の早期対策を可能にするとともに、生活圏への侵入を軽減している。また、関係人口を増やすべく、地域の農業体験や祭り、さらに獣害対策の一環である防護柵の見回りもイベント化し、これらを外部に発信している。 【実習で学んだこと・印象に残ったこと】 自分が農学部で学んだ獣害にかんする情報は、あくまで行政側の数字で判断する範囲のものであり、地域の実情はそれとかけ離れていたことが強く印象に残った。電気柵など強力な対策方法が確立されているのなら問題はその支援金の不足なのでは、などぼんやりと考えていたが、実際にはそもそもその強力な対策方法の有効かつ持続可能な運用が難しいというところが課題であった。これに関し、さともんの方からは、「解決したいのであれば研究サイドではなく実際に物事を変える地域レベルに行く必要を感じた」というお話があり、アカデミア側にいる自らの立場は何ができるのか改めて考え直すきっかけになった。これらは人々の生活を実際に目の当たりにしないとわからないことだと感じた。 また、実際に、生活圏近くに来ているサルを見ることができた。地域住民の方が花火らしきもので大きな音を鳴らし追い払おうとされていたが、サルはあまり動じていなかったことが印象に残った。ある程度強く出なければあちらもどンドン人間をなめてしまうのだ、ということを感じた。こうなると煙花といった少々強い道具を使い、かつ使うタイミングを良く考えて対策を進めていく必要があり、マンパワーが重要になると感じた。このような動物の行動について、サルの慣れや対策効果を数字として可視化する…といったことは、研究者サイドからできる協力の形の一つだと感じた。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

最後に、地域の魅力を感じた。日本家屋らしい建物が多く残っており、自然豊かで食べ物も大変おいしかった。このような魅力を知ることは、その地域に感心を持つことにつながり、ひいては関係人口の増加につながる。実際に足を運ぶことは、上述のような現実を知るために必要ではあるが、純粋に自分の視野を広げることにつながり、それが地域のためになることもあると思うので、今後も積極的にこのような実習に参加したいと思った。



図 1



図 2



図 3

図 1: 人里に降りてきたサル

図 2: このレーダーを配布し、サルの所在地を日常的に把握することで、住民の対策を促進している

図 3: 宿泊させていただいた家。昔ながらの造りで素敵

6. その他（特記事項など）

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

2025 年 4 月 1 日	
所属部局・学年	野生動物研究センター
氏 名	西本千夏

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
兵庫県丹波篠山市
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
丹波篠山実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
2025 年 2 月 18 日 ~ 2025 年 2 月 19 日 (2 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士／〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
特定非営利活動法人里地里山問題研究所 (さともん)、鈴木克哉
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。 本実習は、特定非営利活動法人里地里山問題研究所 (さともん) が主催する獣害対策を学ぶものであった。実習は丹波篠山市にて 2 日間行われた。 座学にて、日本各地の獣害対策、丹波篠山市の活動、および「さともん」の役割について学び、地域住民との交流、ニホンザルの追跡やニホンジカの個体数管理の方法も実際に行った。 これまで獣害対策は、動物を追い払う、または個体数を減らすといった動物に焦点を当てたものと理解していた。しかし、今回の学びを通じて、獣害は人間側にも課題があることを初めて知った。特に、人によって対策方法や獣害に関する知識量が異なるため、人間側の理解が必要であり、行政と地域住民の連携が重要であると感じた。また、防護柵の設置といった対策が施されていても、その管理には人手が不可欠であることも実感した。屋久島実習でも防護柵の設置を見たが、丹波篠山市でも山の中まで防護柵が設置されており、維持管理の大変さを改めて感じた。実際の獣害および対策は、ニュースなどで知っていたものとは異なる点が多く、大変勉強になった。さらに、「さともん」はこれらの獣害対策を単なる対策にとどめず、地域活性化の一環として活用しており、そのポジティブな姿勢が非常に印象に残った。さともんが地域住民と行政橋渡し役となることで協力体制が生まれ、獣害対策だけでなく、地域活性化のイベントを開催するなど、地域全体を盛り上げる取り組みがなされていた。また、都市部以外の地域では、人材の流出による人手不足や資金不足が問題となることが多いが、さともんでは、企業やアカデミアといった地域外の人々も巻き込んだ活動も行っており、活動がすべての人にとって利点となる体制で効果的に機能している点も素晴らしいと感じた。 実際に GPS を付けられたニホンザルの追跡体験をした。運よく捕獲檻にニホンザルが収容された現場に居合わせることができた。個体数調整のために全頭は殺さず、オスのみを処分する判断や対応している姿が印象的であったと同時に、獣害対策を行うためには心を強く持つことは大事だと思った。実際に、檻に収容されたニホンザルの怯えている姿を見ていると心が苦しくなり、処分に抵抗感を覚えてしまった。しかし、動物と人が共生していくためには殺処分もやむおえないことであるため、心を鬼にする大事さも学んだ。また、市の職員だけでなく対策に関わっている人々も現場に来ており、地域住民や行政、さともんの連携を実際に見ることができた。 全日通して、料理がとてもおいしかった。高級であろうジビエ料理をたくさん食べることができ、ジビエの良さを改めて感じた。また、丹波篠山の特産である黒豆を用いた味噌も絶品であった (自分用のお土産として買いました)。地域住民との交流および特産品を用いた料理を食べることで、丹波篠山という地域の魅力を感じることができ大変よかった。宿泊した場所も、日本家屋で懐かしい感じがした。家は隙間が多いため、暖房がない部屋は凍えるように寒かった。また暖房もストーブで火の付け方が難しくとても苦労した。驚きだったのが、私以外灯油の給油の仕方を知らないことであった。田舎育ちが役に立ちました。 本プログラムを通じて、一般的な獣害対策について学ぶだけでなく、獣害対策が行政や地域住民、さらには地域外に住む人々をつなぎ、地域活性化にもつながることを新たな視点として得ることができた。また、

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

実際に現場を見ることの重要性を改めて実感した。特に「問題を解決したいなら、実際に物事を行われ、変化が生まれる場所にいく必要がある」という言葉が印象に残った。私自身、野生動物の絶滅危惧種の保全に関する研究を行っているが、主にラボでの研究が中心であり、保全の現場に足を運ぶ機会は少ない。しかし、今回のプログラムのように実際に現地を訪れることは、動物や地域住民の現状を理解し、解決策を考える上で不可欠であると感じた。特に、アカデミアは一般社会との距離があるように思うため、自身の視野を広げるためにも積極的に現場と関わり、研究に活かすとともに、その成果を還元できるようになりたいと思った。



図 1



図 2



図 3

図 1. 座学の様子

図 2. 鹿ソーセージとイノシシ肉のタコライス

図 3. 檻に収容されたニホンザル

6. その他 (特記事項など)

本実習は PWS よりご支援していただきました。2 日間にわたり私たちを受け入れ、ご教示していただきましたさともの鈴木様、川添様、地元の皆様に心より感謝申し上げます。加えて、ジビエ料理を提供していただきました新田様に感謝いたします。企画・指揮してくださった關さんありがとうございます！